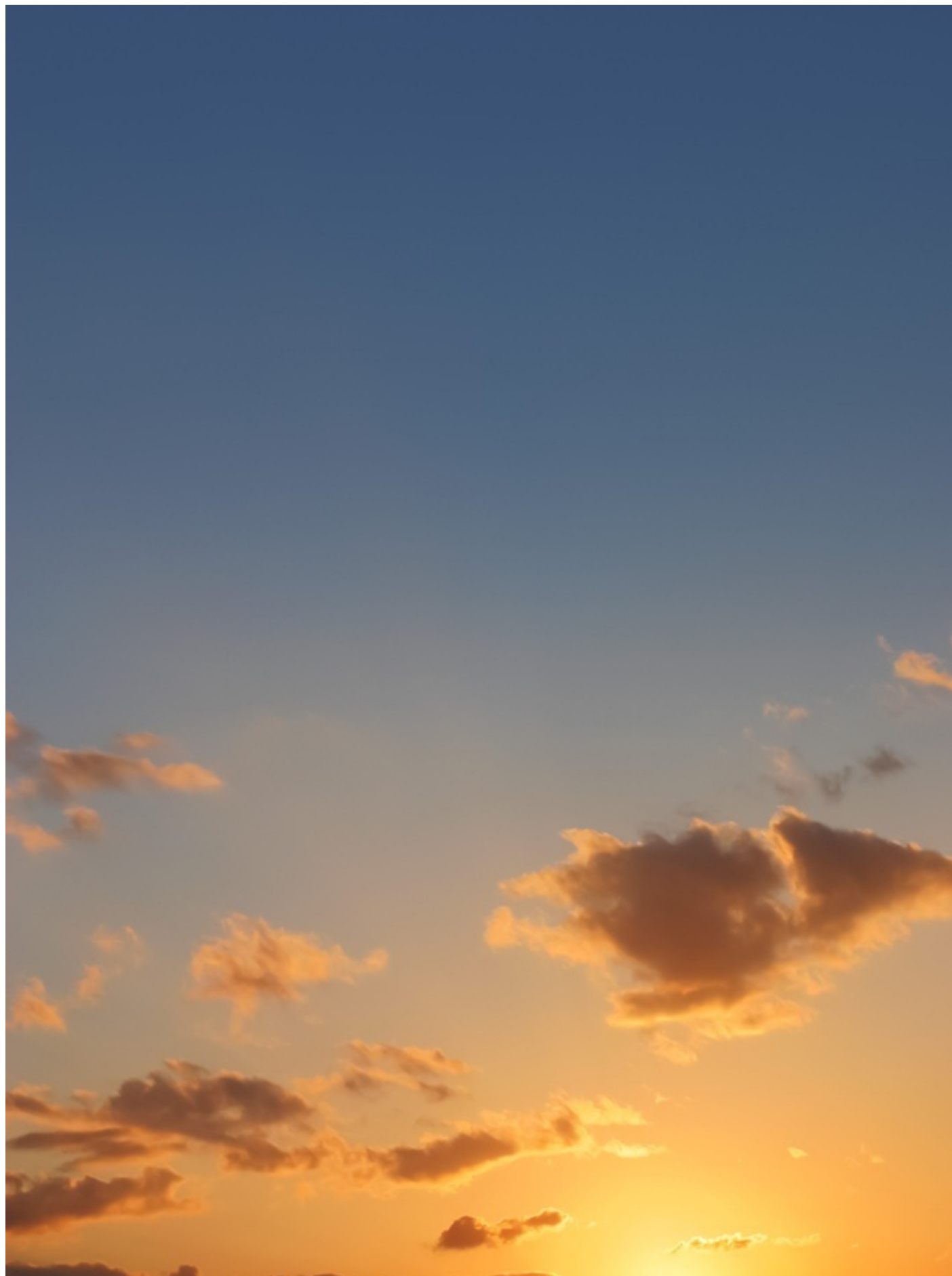
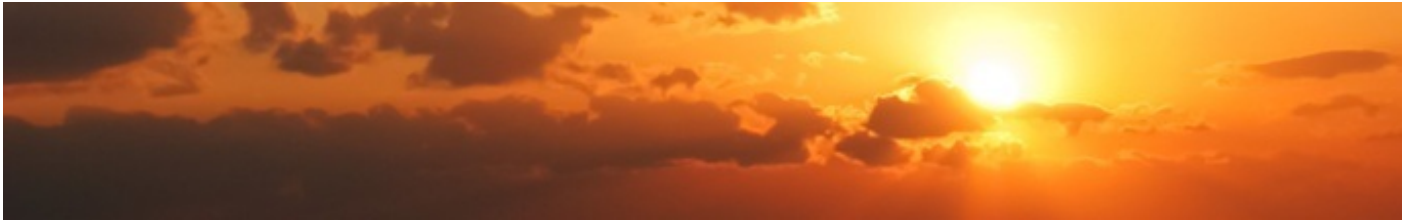


高校一年生の 朝

ヤマダヒフミ





俺は絶対に参与する方法をいつでも探していた。・・・それで見つけたのだ。宇宙の未明の入り口を。

そこに入れば、かつての世界はもうガラス玉の中の小宇宙でしかなかった。・・・俺は眺めた。かつて、俺をなじり、罵倒し、刺し殺そうとした人間がいかにも濁った視線で自動販売機の明かりを目当てに歩いていく姿を。そして俺の親が路頭に迷い、人々が意識せずとも自らの精神の迷路に入り込み、そこで朽ちていく姿を。そして、俺のかつて愛した人々が、無惨にも独裁者達の手によって、殺されていく姿を、俺はガラス玉の目玉で、しっかりと眺めた。

・・・と、そこにもう人はいなかった。残されていたのは、きれいな真鍮の玉だけだった。パチンコ屋にでもおいてありそうな奴だ。・・・そこには俺の似姿が映っていて、そいつは次の瞬間にはもう俺に語りかけていた。

「お前は誰だ？」

「俺は・・・俺だ」

「なら、入れ替わろう。今日から、俺が「お前」だ。」

こうして、俺は「お前」となり、お前は「俺」となった。こうして、この世界に一大転機が訪れた。俺は全てを失う事によってこの宇宙を手にし、奴は・・・奴の事なんてどうだっていい。奴は、別の宇宙に消えてしまったんだ。

俺は精神の眼で全てのものを眺めた。人間はどこにもいなかった。そこには宇宙の創世の秘密や、神が造った真実がちらついていたのだが、俺の目に映ったのは、なんといっても、あの天の川の美麗だった。俺は天の川の水をすくって、足下にそっとかけた。俺の足は膝下から順番に透明になっていき、そしてやがて・・・俺は消えたのだ。

こうしてまた一大転機が訪れた。・・・俺がふと眼をさますと、俺は一人の高校一年生の男子となっていたのだった。